

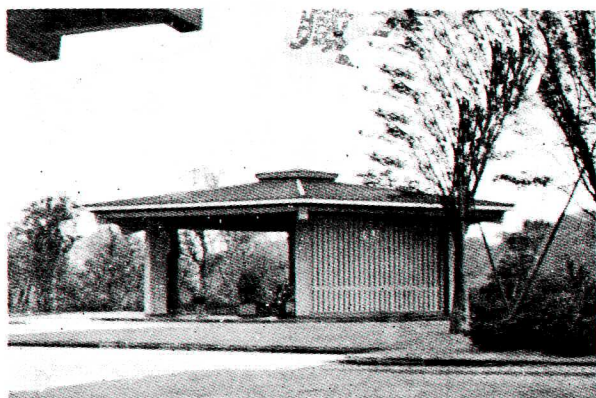
ラバウルの落日

岡本信男著

ラバウルの落日

一等兵の人間記録

岡本信男 著



千鳥ヶ淵 無名戦士の墓

弘文堂

ラバウルの落日



岡 本 信 男

大正5年 静岡県掛川市に生る
昭和17年 高射砲兵としてラバウル方面に従軍
昭和21年 帰還
現 在 (株)水産社社長
著 書 「海を耕す」他
現 住 所 東京都新宿区下落合3ノ1293

ラバウルの落日

昭和37年2月25日 初版発行

定 価 350円

著 者 岡 本 信 男

発 行 者 中 村 正 光

印 刷 者 三 沢 義 輝

東京都千代田区神田駿河台	株式
本 社 電話(251)7186	弘 文 堂
東京都文京区西古川町14	会社
営業所 電話(351)9223	
振 替 東京53909番	

落丁・乱丁等に就ては取換申します

(昭文社印刷 橋本製本)

序

この本の著者、岡本信男君は、十六年前のあの大戦中、同じ戦陣での、私の戦友の一人である。その内容は私にとっては、忘れられない、南方第一線ラバウル方面の戦記なので、想い出ふかく、何回も読み続けた。

ラバウルの地域は、ニューギニアと、海峡をへだてた、ニューブリテン島東端の一角で、ニューギニアや、ガダルカナル敗退の後も、海軍の最大根拠地トラック島の前方防衛地の意味からも、絶対に手離してはならない重要地であった。しかし、米、豪海・空戦力のため、遂に日本内地との、一切の交通が遮断され、僅かに、無電連絡により、大本営との交信のみが、保たれたに過ぎない。そのため、ラバウルの方面陸・海十万の将兵は、それこそ全員一体となり、十字鍬と円匙だけで、幾重もの丘陵地帯に、地下要塞を作りながら、原始密林をきりひらいて畑地を開墾し、農耕をいとなんで自活し、その上、毎日、敵の戦車に対する爆砕猛訓練をつづけたものである。

米軍は、ついにラバウル攻撃を断念し、その海軍と運輸力とを利用し、遠く北方及び西方のサイパン島やフィリピン方面に転じてしまった。ために私共は、大きく祖国に貢献の実をあげずに、終戦になってしまった。それにしても、大衆が一致団結してやれば、どんな事がなし得

るものかは、ラバウル十万の将兵、皆が感得したものである。

もとより、最高指揮官だった私と、兵卒であった岡本君、——毎日毎日、敵の空軍の猛爆撃をうけながら、汗とあぶらをたらし、働き続けた人々——とは、この間の感じかたが、同じものではあり得ない。だから本書の記述すべてを肯定するものではないとしても、著者が、赤裸々の気持で記されたものは、「なるほど、兵隊さん達は、こんな気持でおったのか」とか、「こんなにも苦しかったのか」というような、人間の本性、真情を知らしめられ、反省させられたり、感動せしめられたところが多い。

あの惨たんたる大戦の悲劇を体験した、わが民族のすべては、いま絶対に、世界の平和を念願しているのに、東西二大陣営の対立は、日に日に、とくにそのイデオロギーの貫徹に狂気のようにいらだち、地上幾十億の全人類に「さて、どうなるものか」との不安をおぼえしめている。こんな現実の情勢に対し、万が一にも戦争は起ってはならない。そのためにも岡本信男君のこの体験記は、強く教えられるものがあると信ずるので、私は、広く多くの方々に、これをお読みいただきたいと、おすすめいたす次第である。

昭和三十六年秋

東京の自宅にて

今村 均

目次

序……………今村均

序章……………二

北鮮会寧……………二

時速六哩……………三

ラバウル灣……………三

戦雲……………七

高射砲四十七大隊……………七

ラバウルで待期せよ……………三

ネズミ輸送……………五

ダンピール海峡……………五

ココポ大病院で……………六

東飛行場……………三

全員呼集……………三

ガ島帰り……………六

南の魚……………六

一等兵の深酒……………六

九番砲手……………三

ニューギニアの敗残兵……………七

ココボ黄昏……………一〇一

二つ星……………一〇一

南飛行場を守れ……………一〇六

ココボ黄昏……………一〇六

敵機撃墜……………一〇八

最後の補充兵……………一一二

孤島ガロベ……………二五

名も知らぬ島……………二五

死の饗宴……………三一

転進命令……………三六

今様俊寛……………四〇

脱出……………四五

ジャングルの地図……………二五

無縁仏……………二五

ジャングルの魔性……………二六

湿地帯……………二七

渡河……………二七

終着……………二八

孤立……………二九

最後のあがき……………二九

すべてを地下に.....	二九三
爆雷を抱いて.....	二九六
椰子の汁は甘かった.....	二〇一
野生の食物.....	二〇三
農耕兵.....	二〇六
同窓会.....	二一三
全ては空し.....	二一八
敗戦悲曲.....	二一九

実感.....	二二九
三国人寝返り.....	二三三
豪軍進駐.....	二三六
光部隊(戦犯収容所).....	二四一
鏡ガ原集団.....	二四四
復員.....	二四九
あとがき.....	二五七

原书缺页

原书缺页

原书缺页

原书缺页

序 章

北 鮮 会 寧

会寧はもう晩秋であつた。

長白山脈の最高峰、白頭山おろしが、赤ちゃけた砂ぼこりをまき上げて、日ごとに唸りながら兵舎の窓をゆすぶりつつける。剃刀の刃のような朝夕の冷えに、きびしい冬將軍の迫ってくる足音を感じさせた。こいつは古兵以上の、待ったなしの試練である。

ピンタにつづくピンタでキリキリ舞いさせられると、進歩どころかかえって初年兵の悪循環で愚鈍なデクの坊になり、一種のニヒリスチックな「どうともなりやがれ」の心境が、あきらめと、順応の人間につくりかえる。なんのことはない、娑婆からもってきたヒューマニズムを捨てて、一刻も早くいのちの惜しくないミリタリズムの一単位に仕上げる工場の職工になることだ。

序 章
初年兵教育のキリキリ舞いは、すなわち、他のいらざる余念を排除して「軍人に賜りたる勅諭」と「戦陣訓」に集中させ、りっぱな帝国軍人に仕上げることにあるが、高邁な大義名分の裏をひっぱがえすと——人ごろしのうまい命知らずのケダモノになることだった。恐るべき人

間改造だ。これに忠実であれば星がふえて楽になり、つぎの新兵へ、ビンタのリレーができるという理想の餌がおいでおいでしている。そもそも私が軍隊生活に抵抗を感じたのは、この理不尽なケダモノじみた機構と暴力にあった。

しかし、だからといって、星一ツの非力な一人の初年兵に何ができよう。巨大きわまる軍隊の中のちっぽけな一単位の芥子粒。ただ、私のささやかな抵抗は、軍隊生活に調子を合せながらも、あくまでも「自己を失わぬこと」にあった。私が、私のオリジナルを失ったら、私ではなくなる。生ける屍じやないか。この意志をどこまで貫けるか、そのために要領わるくぶきっちょで昇進が遅れてもかまわぬ。おれはあくまでもおれなんだ！ まことに素朴ながら、三カ月の新兵生活に得た処世観だった。これが私のつかい棒となり、さまざまの悲喜劇を生む源泉となって、ついに「万年一等兵」を押し通したが、もしこの抵抗する精神力がなかったら、私はいまごろジャングルの土と化していただろう……………。

そうしたキリキリ舞いのある日、千葉准尉から呼びだしをうけ、私はハッと体の硬直するのをおぼえた。准尉といえ、兵隊にとっては最高権威者だ。ビンタの恐るべき習性から、どうせろくなことではないだろうと、一瞬、自分の落度の有無を思いめぐらしながら兵舎の廊下を屠所へひかれる羊みたいに歩きながら、私は千葉准尉のおもかげを心に浮かべた。一見、色が白くて役者のような優男で、いつもニコニコして大きな声も出さない、あらくれ摘いの中に一

風か変わったタイプだが、このニコニコがじつに安心できない代物なのだ。なにしろ、中隊の人事担当という生殺与奪のにらみも手伝ってか、どうやら外面如菩薩が内面如夜叉に直結している。とくに新兵の身元調査や、思想傾向のしらべは綿密にやっているし、ながい専門的な職掌がらで、知らん間に人の心の奥そこまでも見とおしているようだった。

つまり、この観察によって、書きこまれる素行調査のメモは、不変のレッテルながら兵隊につきまとうのだから、千葉准尉に睨まれたら蛇と蛙の因果関係どおり、まず軍隊にいる間じゅううだつが上らない。

私は、不安と好寄心のこんぐらかったまま、直立不動の姿勢をとると、

「岡本、お前はたしか水産を出ていたな、いい学歴をもっているじゃあないか。それなのに、まだ幹部候補生の志願をしていないようだな？」

「はい！ しておりますん」

「軍は幹部養成をいそいでいる。資格のあるものは、全部志願することが建前なんだぞ——」

「はい……」

「お前どうする気か？」と准尉はまともからヒタとみつめた。

私の脳裡を稲妻のように、この三カ月の軍隊生活がかすめた。つぎの返答をするまで、わずか五秒ほどの短いものであったが、私の心にひらめいた抵抗はかなり長いものだった……。はやく娑婆へ帰りたい、そしておのが長所をのばす真実の仕事がしたい！ だからして、幹部候に

などなかったら、それこそいつ帰れるか分ったものではない。

じっさい、土地柄のせい、会寧の古参兵殿たちは、ソ連国境に近いし、満州の関東軍と接しているだけあって、ひととき殺気だっていた。かれらもこうした環境で鍛えられ、その復讐のリレーにおまけをつけて、新兵にたいする仕打ちは、人間性無視どころか、一個の物体——弾的になる道具でしかなく、まったく息の根がつまる思いであった。絶望と背中あわせだった。私は戸籍に朱が入って、家族が世間から辱しめをうけることさえなかったら、なんらかの手段で、脱走していたかも知れない。

やれ編上靴のきがき方がわるい、それ兵器の手入れがなっちゃん、こら、戦友殿(古兵)の衣類の洗濯の仕方はなんちうざまだ、と呶鳴ってビンタを張る材料は、それこそどこにも至る所に転がっていた。かれらは自らのうっぶんを晴らすために、私たちを殴ったり蹴ったりするほかに、もっともタチの悪い新兵同士でやる〃往復ビンタ〃を、さも楽しげに眺めた。それでも足らず今度は営庭を早駆けさせて、動けなくなると、とんで行ってビンタの気合いをかけて又走らせる。まさに人間失格というか、早く死んじまいたい心境に迫いやって、「帝国軍人の強さ」を獸的に立証しようというのだ。

こうした仕打ちを、三カ月うけてきた。堪えがたいほどの暗い気持の底で、私はたとえ古兵になってもこんな行動は絶対にしまい。こんな振舞いをしなくても、人を強くして技能をのば